アジアにおいて political economy の翻訳語として登場した諸用語の原義とその進化

李憲昶

はじめに

ヨーロッパ経済学の翻訳語を用いる漢字文化圏において、その概念史研究を全うするためには、訳語が成立・確定した経緯とその歴史的背景を考察する概念の翻訳史に加え、訳語として登場した用語の翻訳以前の概念の状況とその進化を扱う訳語の概念史も必要である。筆者は political economy と economics の概念史、およびその翻訳史を不十分ながら考察したことがある。[1] 本稿では、先に、経済という漢語がどのように進化し、その翻訳の対象となる用語の概念に接近したのかを考察する。経済学以外に、political economy または economics の訳語候補になった用語についても探る。アジアの他の主要文化圏であるインドとイスラム世界の訳語についても扱う。このような考察は、比較史的視野において、思想と概念の変遷、さらには翻訳の経緯を理解するために役立つものである。[2]

1　漢語「経済」「経済学」の概念とその変化

1-1　漢語「経済」と古代ギリシャ語

周知のように、political economy または economics の訳語は「経済学」である。では、この訳語はいかにして決定されたのか。その経緯を理解するためには、political economy だけでなく、漢語「経済」の概念とその進化も理解する必要がある。

Economics の語源とされる、クセノフォン（Xenophon）の *Oikonomikos*、そしてアリストテレスの偽作として知られる *Oeconomica* は、「家庭管理」を意味し、これに該当する漢語は「斉家」「家政」または「家計」である。17 世紀の中国で活動した宣教師ロドヴィコ・ブーリオ（Lodovico Buglio）は、ラテン語 oeconomica を「斉家」と翻訳した。[3] 西周は「百学連環」（1870 年）において economy を「家政」と翻訳した。今日、日本において *Oikonomikos* の標準的な翻訳は『家政論』である。[4]

Political economy の元来の意味である「国家管理」に相通じる漢語は、「治国」または

1　李憲昶「漢字文化圏における Political Economy と Economics の翻訳」沈国威編著『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成』関西大学出版部、2008 年。

2　本稿は、筆者が執筆中の概念史に関する著書『経済・経済学』第 5 章を中心とする抄訳である。

3　雷立柏（Leopold Leeb）編『漢語神学術語辞典』宗教文化出版社、2007 年。

4　重田園江「経済」石塚正英・柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典』論創社、2003 年、85-86 頁。

「経済」である。経済は「経世済民」「経国済民」「経国済世」または「経世済俗」の略語であり、国家を治め、人民を救済するための正しい政治や道徳的教化、民生安定などを包括する概念である。最善の政治秩序を探究する学問体系としてのアリストテレスの *Politics* に符合する漢語を探しても、「経済」または「治国」になるのである。周知のように、politics の訳語としては「治国」に近い「政治」が、political economy の訳語としては「経済」が選択された。経世済民は「治国」と同じ意味を持つが、人民を救済する「済民」の語によって民生の安定のための物質的欲求の充足に重きをおく点において、今日の経済の概念に接近する素質を内蔵していた。「経済」は儒学の政治理想を盛る用語であって、訳語として登場した漢語の中で、これ以上に愛用されたものはない。

『荘子』に「経世」が現れ、『書経』に「以済兆民」という句節があり、晋の葛洪（283–343 年）が「経世済俗」という用語を使用した。経世済民の略語である「経済」は西晋時代（265–316 年）に初めて現れ、唐代以降広く使用された。[5]

クセノフォンの *Oikonomikos* は、主に家庭管理を扱いつつ、国家管理をそれと同一の原理に立脚するものとみて、その説明を加えた。*Oeconomica* も同じ対象を扱っていたが、家庭管理術（housecraft）が国家管理術（statecraft）の構成要素を成すとした。アリストテレスは、家庭管理論が総企画的学問である政治学の下位学問であるとし、*Politics* において、政治共同体としての polis を研究するに先立って、その構成要素として家庭経済を扱った。漢字文化圏においても、斉家が治国の前提であった。

しかしながら、二つの概念の相違点も小さいものではなかった。アリストテレスは *Ethica Nicomachea* において、oikonomike が富を目的とするとみたが、「斉家」「家政」という概念が富を目的とするとはいえない。儒学思想は、本末論に基づいて体系化された。儒学思想を体系的に論じた経典である『大学』の伝文 10 章によると、道徳的修養としての修身を先に果たして後、治国を行わなければならないし、治国の「経済」論においては、道徳が根本で財物は末節であり、国家は利益ではなく、正義が有利であるとみなければならないとした。このように、漢語「経済」が、道徳を基本的かつ中心的な原則とみなし、功利に対する警戒観を内包していた反面、*Oikonomikos* は倫理的な性格をもちつつも、むしろ功利を基本的かつ中心的な原則とみなしていた。アリストテレスは *Ethica Nicomachea* において、合理的選択を倫理の一徳目とし、「自由人らしさは、財産によって語られる」と論じたが、漢字文化圏では、このような発想は言説として成立しなかった。すなわち、oikonomikos は漢語「経済」よりも、今日の経済概念により近かった。

1–2　中国における「経済学」という漢語の出現とその概念の変化

中国において「経済学」という用語は、8 世紀の唐代ですでに使用されていた。[6] 四庫全書と中国基本古籍庫を検索してみると、宋代には「経済学」または「経済之学」という

5　叶坦「“経済”補考」『讀書』1997 年 11 号、136 頁；馮天瑜「中国語、日本語、西洋語間の相互伝播と翻訳のプロセスにおける「経済」という概念の変遷」『日本研究』31、2005 年、160 頁。

6　叶坦、前掲論文、137 頁。

用語を使用した文献が多数あった。その中には程朱学派もあり、北宋代陳襄（1017–80）の『古靈集』には、「郷貢進士である程頤は高尚で堅実に行いながら、「経済之学」を身につけていた」とある。『朱子語類』は、陸宣公（本名は陸贄、754–805）の「奏議」において租税を詳しく論じたところで、「経済之学」とした。朱子が、今日の経済学で扱う一領域を「経済之学」に属すると述べた事実は注目される。

もちろん、門戸開放以前の東アジアの「学」は、法則を扱う近代学問の水準には至らず、science と翻訳するのは難しい。漢語「経済学」も例外でなく、古典学派経済学の political economy という社会科学には及ばず、クセノフォンの *Oikonomikos* と同じ水準の言説（discourse）にとどまっていた。今日の観念では「経済論」と呼ばねばならないが、当時の表現を生かし、「経済学」という用語を使用する。注目すべきは、このような「経済学」も、近代経済学の内容に、徐々に接近していったことである。

儒家は、学派の成立期から「実」を重視し、標榜してきた。ここで「実」とは、「修己治人」または「経世済民」を意味する。実学は、修己治人の課題をすべて包括する一方、「経済学」は、治人に該当する。ただ、儒学の実質的な効能は、治人に十分に反映されるので、儒学で言う「実学」は、「経済学」に通じるものである。また、「経済学」という用語の使用が確認された唐代に、興味深いことに「実学」という用語も現れている。修己治人の学問なので「実学」であり、それで虚妄な文辞などを「虚学」として警戒した。経世学の発展にもかかわらず、理想的な道徳国家と道徳社会は建設されず、道教と仏教という異端が横行したので、儒学の改新を試みた学風が台頭したが、それが宋代の理学であり、朱子はその頂点に立った人物である。実学を自負し、その問題意識が透徹した程朱学派が、「経済学」という用語をよく使った。

宋代三百余年の間、思想は理学派と功利学派に二分された。政治思想では後者が中心を占め、制度改革論の理念的基盤を提供した[7]。それでも、功利を重視する学派ではなく、それを警戒する理学派が実学と「経済学」を標榜したことは興味深い。程朱学派による義理学が確立されただけでなく、それに立脚した治人の学問である「経済学」と「実学」が台頭し、また、功利学派が有力な潮流を成した点において、宋代は学術史的に重要な時期であった。このような学術的発展を実現した主体は、経世の責任意識と自負心をもち、科挙によって官僚に選抜された知識人である。このような士大夫層の出現を産んだ時代背景として、唐宋変革期に科挙制の確立とともに官僚制的中央集権体制が貴族的支配を代替した事実を挙げることができる。唐宋変革期における市場の発展などによって、宋代に近代初期という意味での近世が始まったという学説が有力である。宋代の功利学派は、このような市場の発展に支えられたとみなければならない。

北宋代の功利学派を代表する人物が王安石ならば、南宋代は陳亮（1143–94）と葉適（1150–1223）であった。王安石の富国強兵策に対する旧法党の批判で両陣営間に対立があり、陳亮と朱子の論争があった。朱子が功利学派を批判する核心は、「心を治めず身を修

7　蕭公權『中國政治思想史』台北：中華文化出版事業委員會、1954 年。

めず事功を慕う」という句節によく表れている。[8]「事功」は仕事の成果という意味であり、「功利」は「行為の効果としてもたらされる（社会的）利益」という意味であるが、[9]互いに通じる用語である。朱子など理学派は、租税政策などの事功を排除するのではなく、それに対する道徳的優位を徹底的に貫徹しようとした反面、功利学派は、修己の道徳が根本にあり、治人の事功は副次的なもの、という本末観には従わなかった。朱子が、義理に立脚した王道政治を擁護した一方、陳亮は、朱子の「義理之学」が現実問題の解決には不十分であることを指摘し、「義利双行」の「王覇並用」を主張した。元代の胡祗遹（1227–93）が区分した儒学の分野において、「経済之学」は功利ではなく、義と道を追求するものであった。[10]理学派は、「性命経済学」「道徳経済学」という表現も使用した。倫理道徳の事功に対する絶対的な優位を貫こうとする程朱学派の「経済学」は、経済合理主義を追求する今日の経済学へと進むのは難しい。

宋代以後、「経済」という概念において、物質生活に関わる内容が徐々に比重を増していくが、[11]そのような中で、「経済学」の概念も変化した。明代以後、「経済学」は次第に義理よりも功利と結びつけられるようになる。その変化を表す用例として、王褘（1321–73）の『王忠文公文集』にある「永嘉には経済之学が、永康には事功之学があった」が挙げられる。功利学派を代表する人物である陳亮は永康出身で、葉適は永嘉出身であった。王褘がなぜ葉適の学問を「経済之学」、陳亮の学問を「事功之学」と別に表現したのかはよくわからないが、この頃には両用語が相通じていたようである。

明末清初に朱子学と陽明学は空理空論だという批判が高まる中、経世致用学派が成立し、宋代の功利学派を再評価した。明末の異端的思想家である李贄（1527–1602）は、功利思想を体系的に撰する葉適を「経世大臣」と評価した。顔元（1635–1704）は葉適を王安石と並び、「経制の学者」と高く評価した。経制は国家を治める制度という意味で、漢代の賈誼（紀元前 200–168）が「治安策」において、この語を使用したことがある。黄宗羲（1610–95）が編纂した『宋元学案』を、彼の門人である全祖望（1704–55）が補完しながら、葉適が際立った学風を成したことを評価し、「永嘉は経制をもって事功を言う」とした。朝鮮の君主である正祖は、「経制の書籍」として法典を挙げた。

清代の章学誠（1738–1801）は、朱子の学問が、「性命」（義理）、「事功」（経世）、「学問」（考証）および文章という本末を具備したものであると評価した。章学誠にとっての「経済学」は、事功を扱う学問へと変わっていった。明末清初に宋明時代の形而上学に対する批判が高まり、経世致用学が成立したことが、「経済学」が道徳を扱う学問から事功を扱う学問へと転換を完了させた契機になったと見られる。これは、「経済学」が political

8 『朱子年譜』巻三之上、淳熙 11 年、「辨浙学」。

9 奥野満里子「功利主義」、前掲『哲学・思想翻訳語事典』、106 頁。

10 「在物爲理處物爲義、此義理之学也。天賦爲命人受爲性、此性命之学也。下学人事上達天理、此天人之学也。正其義不謀其利、明其道不計其功、此経済之学也。觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下、此禮樂文章之学也」（『紫山大全集』）。

11 馮天瑜、前掲論文、165 頁。

economy の訳語として受容されるのを後押ししたと考えられる。

1-3　朝鮮における「経済」と「経済学」の概念、そしてその変化

高麗の成宗は 992 年、人材推薦に関する教書において「経済邦家」の効果を論じた。[12] 儒教政治理念とともに、経済という漢語も導入されたのである。朱子は実学を標榜し「経済学」を論じたが、朱子学が導入された高麗末朝鮮初の 14 世紀後半に、実学だけでなく、「経済学」という用語も使用され始めた。恭愍王 8 年（1359）に李仁復は、「生涯、習ったものが「経済之術」なのに、なぜひとつも王に陳述しないのか」という誹謗を受けた。[13] 権近は、李穡の「経済之学」が高麗王朝の滅亡によって施行されなかったことを惜しみ、呂興府院君閔霽の「経済之学」を論じて、「経済之学」を講明しようとする策問を提示した。[14] 策問は文科試験で時務策を問うものである。

クセノフォンは *Oikonomikos* で、「oikonomia が episteme の一分野を指す」としながらも、techne のような専門的言説になることを目指した。Episteme は knowledge と翻訳される。Techne は art と technology の語源であり、技芸と翻訳される。「経済之術」の「術」は techne と同じ意味である。アリストテレスは episteme に理論的な知識体系という意味を賦与し、このような高い水準の学問として *Politics* などを著述した。門戸開放以前の東アジアでは、クセノフォンの *Oikonomikos* に相応しい経済管理の言説はあったが、アリストテレスの *Politics* に相応しい社会科学は成立しなかったようである。

では、高麗末朝鮮初において、「経済学」という漢語の意味はどのようなものであったか。「経済之学」を講釈しようとする権近の策問をみると、文物礼楽の制度を整備することで、義理を明らかにし、民生の安定を図る学問を意味していたようだが、その中心は、道徳教化を通じて美風良俗を成すというものであった。そのような点において、権近の「経済学」は程朱学派の概念に近かった。権近は、朝鮮王朝の国家制度を設計した鄭道伝の「学問・事業・文章」に対して、「「性理之学」と「経済之功」のようなものは……後学が尊崇するところだ」と評価したが、[15] このように「性理学」と「経済」の事功とを区別するところは、明代以後に現れた変化に相通じており、興味深い。高麗末朝鮮初に導入された元代の朱子学は、宋代の程朱学派ほど、事功に対する儒教道徳の徹底した優位を貫徹しようとはしなかったのである。程朱学とともにその「経済学」が導入されたのだが、王朝の交代期に、国家制度を改革する必要性が、程朱学よりも事功をより重視する「経済学」を成立させた。

15 世紀に経世論を活発に提示した梁誠之については、「公の著述はすべて経済実用のためのものであった」という評価がなされた（『訥齋集』凡例）。16 世紀に経世論を提示した

12 『高麗史』巻 75、志 29、選擧 3、銓注。
13 『高麗史』巻 112、列伝 25、李仁復；『高麗史節要』27 巻、恭愍王［二］。
14 『牧隠集』行状；『陽村先生文集』巻 23、祭文類、代趙雨亭祭漁隠先生文；『陽村先生文集』巻 33、雑著類、策題類、壬午年會試策問題。
15 『陽村先生文集』巻 23、讃類三峯先生眞。

李珥について、兪棨（1607–64）と朴世采（1631–95）は、朝鮮における「経済学」を最も高い水準で確立したと評価した[16]。

高麗末朝鮮初に朱子学とそれに立脚する「経済学」が成立したとすれば、16 世紀後半には、李滉と李珥によってそれらが集大成された。このような過程を経て、朝鮮の儒学は、中国に追いついてゆく。朝鮮王朝時代における儒学の発展の第一段階で朱子学が導入されたが、第二段階では朝鮮内部で朱子性理学が深化した。朝鮮後期の第三段階では経世致用学が深化し、朱子性理学から脱却しようとする実学が台頭した。

第一段階および第二段階の「経済学」は、程朱学の倫理的性格が強かった。ところが、第三段階の新しい実学では、「経済」の意味が economy の概念に接近し、「経済学」は功利を重視し、近代学問である経済学へ向かってゆく。ここでまず注目すべき人物は、柳成龍（1542–1607）である。彼は朱子学に拘らず、陽明学や諸子百家思想までを吸収した政策論を樹立し、具現した。彼は農業だけでなく商業も重視する富国論に立脚し、財政を改革し、産業と技術の育成を目指した。鄭経世は、柳成龍の業績を「常に経済之業に留意し、礼楽・教化・治兵・理財などの事業を綿密に講究し、彼の才能は事務を上手に処し、彼の学問は実用を成した」とまとめている[17]。重義軽利思想である儒学の「経済論」では元来道徳が根本的な意義をもっていたが、柳成龍において「経済之業」の中心は功利の領域へ移行した。16 世紀後半期、李滉らによって義理を明らかにする朱子性理学は高い段階に達し、李珥によって道徳と功利を包括する「経済学」が体系化された。さらに、柳成龍によって朝鮮王朝後期の実学へと道を開く変化が現れたのである。

柳馨遠が 17 世紀中葉に著した『磻溪隨録』は、「経済大文字」および「経世有用之学」と評価された。『磻溪隨録』は経制の国家制度論を集大成したといえる。柳馨遠は「利益を追い、損害を避けることが萬古天下共通の人情だ」と認識して、道徳論に傾倒した一般朱子性理学者とは異なる、物質的インセンティブを重視する経世論を提示した。彼は「土地が天下の大本であり、大本がまず正しく立てば、すべての制度もそれに従い、道理にかなう」とし、土地制度の改革を最優先の課題とした。このように、『磻溪隨録』は、今日の意味の経済を基本的内容とした。

『孝宗実録』9 年（1658）9 月己亥の記事は金堉の死亡を伝え、「生涯、経済を自身の任務とした」と評価した。金堉の主な業績は、大同法の施行という租税制度の改革であった。彼はまた銅銭の通用策にも尽力した。その点で、金堉が任務とした「経済」の中心を成すものは、今日でいう経済政策であった。柳馨遠の著作と金堉の政策が「経済」の代表的業績と評価されたことは、この漢語が economy の概念に接近してきたことを示している。

洪大容（1731–83）は学問を「義理之学」「経済之学」および「詞章之学」に分類し、「義理学」を根本としながらも、「経済学」と「詞章学」にも独自の意義を付与した[18]。こ

16 『市南先生文集』巻 17、雑著、江居問答；『南溪先生朴文純公文正集』巻 66、序、忠定公章疏序辛酉六月八日。

17 『愚伏先生文集』巻 20、西厓柳先生行状。

18 「舎義理、則経済淪於功利、而詞章淫於浮藻、何足以言学。且無経済、則義理無所措。無詞章、則義

れは、中国の章学誠が提示した本末兼備の学問観を受容したものである。徐瀅修は 1799 年、上の三つの分野に清代の考証学である「名物之学」を追加した[19]。このように言論の領域が専門化されていく過程は、人文・社会科学が分化する兆しと捉えることができる。

今日、人文・社会科学に該当する分野は、前近代の漢語で義理学、「経済学」および詞章学へ分類することができる。詞章学は、今日でいう文学に該当する。義理学は理気の存在論と倫理学を合わせた哲学に該当する。功利に関連づけられる「経済学」は政治学を中心領域とし、今日の経済学を含む。義理学と「経済学」を合わせれば、イギリスの道徳哲学に相当する内容である。儒教という一種の道徳哲学に包括された「経済学」に最も相応しい英語を探すとしたら、アダム・スミスの “expediency” である。

李德懋（1741–93）は、朝鮮の良書として道学の『聖学輯要』、「経済」の『磻溪隨録』、医術の『東医宝鑑』を挙げた。普通の性理学者だけでなく、実学の性向を持つ朴世采も「経済学」の集大成とみなした李珥の『聖学輯要』を道学に分類し、「経済」の代表的な著書として『磻溪隨録』を挙げたことは、「経済」が今日の概念に接近していったことを表している。朱子性理学者にとって「経済学」の基本目標は、義理を明らかにすることであったが、章学誠・洪大容・李德懋にとって「経済学」は事功の領域を扱うもので、義理学は別にあった。ところで、洪大容は実学者であったが、「義理を捨てれば経済は功利へ陥る」と警戒した。朝鮮王朝後期、経済思想の進展があったが、儒教倫理の制約から抜け出した経済観をもった士大夫は、朴齊家（1750–1805）など、ごく少数にすぎなかったのである。

1–4　徳川日本における「経済」用語の導入とその概念の変化

日本では、徳川時代に「経済」という用語が広く使用されるようになった。長い戦乱の時期が終息し、平和な時代が到来して、経世済民の要求が大きくなったためであろう。1660 年代に、「一応の纏まりをもった経済論が成立した」[20]。さらに、「経済」の語が題目に入る著書が編纂された。太宰春台（1680–1747）の『経済録』（1729 年）が、「凡天下・国家ヲ治ルヲ経済ト云」という定義を提示した点にみえるように、「全くの経世済民論」であった[21]。太宰はこの本で物理と道理の区別を重視し、「経済論」を物理という一種の法則概念で把握しなければならないという観点を提示した[22]。経世済民は儒教の政治的理想であって、元来道理の領域に含まれるが、朝鮮よりもはるかに遅れて経世済民の議論が行われた日本において、経世済民に関する最初の本格的な議論の書が、道理から離れて物理を明らかにしようとする観点をとったことは驚くべきである。日本においては儒教社会が成立せず、儒教理念を重視していた太宰も、そこから抜け出す自由な発想ができたからだと

理無所見。要之、三者舎一不足以言学、而義理非其本乎」（『湛軒書外集』巻 7、燕記、呉彭問答）。

19　『明皐全集』巻 14、明皐徐瀅修汝琳著、劉松嵐傳。

20　杉原四郎・逆井孝仁・藤原昭夫・藤井隆至『日本の経済思想四百年』日本経済評論社、1990 年、33 頁。

21　馬場宏二「経済という言葉――意味・語源・歴史」大東文化大学 Research Paper 44、2004 年、5 頁。

22　丸山眞男・加藤周一［校注］『日本近代思想大系 15　翻訳の思想』岩波書店、1991 年。

思われる。彼の師である荻生徂來（1666–1728）の影響もあったであろう。『経済録』で経済思想を最もよく表している「食貨」の項は、農業を基本とし、商業を軽視する伝統的な価値観に基づいている。1740年代の『経済録拾遺』では、「凡経済ノ術ハ、医師病ヲ治スル如シ。……国家ニ制度ヲ立テルハ本ナリ」とした。そして弟子百家の覇道を掲げ、領主が「市賈」の方法を追求して金を蓄積し、「国用」を豊かにすることが勧奨されている。これは儒学の経世済民論から離れていた。

佐藤信淵（1769–1850）は、1822年の『経済要略』において「経済トハ、国土ヲ経営シ、物産ヲ開発シ、管内ヲ豊ニシ、万民ヲ救済スルノ謂ナリ」とし、今日の経済の概念に接近した。[23] このように、徳川日本では、「「経済」という語が、概念的理念的な政策の意から、実質的経済政策の意へ移行を開始する端緒」が現れた。[24] 朝鮮と中国にもこのような積極的な経済観がみられたが、それらを「経済」という用語で定義した事実はみられない。

朝・日・中三国すべてにおいて、漢語「経済」の概念は義理に対し功利の比重を徐々に高め、今日の経済の概念に、緩やかに接近してきた。Political economy だけでなく、漢語「経済」の概念も進化したのである。このような概念の変化は、市場の発展を反映したものとみられる。中国は唐宋変革期に、日本は徳川時代に市場が発展したことはよく知られている。朝鮮王朝中期においても、中国と日本には及ばないが、市場が成長した。

徳川日本は武家が権力を握った、中央集権的封建制であったので、文官優位の中央集権的君主制である中国および朝鮮とは違って、儒教理念で社会を統合することができなかった。そして徳川日本の経済統合には国家的再分配があまり機能せず、市場が重要な役割を果たした。それで、徳川時代に経済社会が成立したという主張も提起された。[25] 門戸開放以前の朝鮮代と明清代においては、政策は経済安定策を越えることがなかったが、田沼意次は、1767–86年に徳川幕府の老中であった間、重商主義的な政策を押し出し、18世紀には多くの藩が特産物を専売し、商品生産を奨励した。儒教社会ではない徳川日本においては、功利に対する道徳の優位が貫徹することはなかった。そのため、日本は儒教の理想を表す用語である「経済」から、義理の要素をいち早く脱却させることができた。このような思想的基盤の相違も作用して、門戸開放以後の19世紀後半に、日本において経済学が中国と朝鮮より活発に導入された。その背景には政治・経済構造の相違があった。

2　家庭管理論としての「経済」

経世済民論は、もともと国家管理論であった。法則を扱う近代経済学が成立するためには、国家次元の政策論だけでなく、民間次元の経済論が必要である。そのような点で、economy の語源であるクセノフォンの *Oikonomikos* が意味する家庭管理論に相応しい「家政」などの漢語が早くから使用されたことは注目される。『大学』ではすでに家庭を治

23　馬場宏二、前掲論文、6頁。
24　竹浪聰「けいざい（経済）」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙』第10巻、明治書院、1983年、3頁。
25　速水融『日本における経済社会の展開』慶應通信、1973年。

める「斉家」の原理が、国家を治める「治国」、すなわち経済の原理と通じることが指摘されていた。

紀元前 4 世紀前半に、ギリシャのクセノフォンは家庭管理論の著書である *Oikonomikos* を出し、その後ヘレニズム時代の紀元前 2 世紀末に politike oikonomia という用語が現れた。一方、中国では春秋戦国時代にすでに国家管理に関する議論と著述が活発になっていたが、家庭管理論の出現ははるかに遅れた。中国の春秋戦国時代および古代地中海世界双方において、市場と貨幣経済が成長していたが、両地域の国家体制と経済統合方式は大きく異なっていたからである。『書経』に表すように、中国では春秋時代以前から、治者による国家管理の議論の伝統があった。紀元前 4 世紀の戦国時代に専制君主の領土国家体制が成立して、国家的な再分配が経済統合に及ぼす影響力が大きくなった。激しい国家間競争の中で、能力があれば出世の道が開けた春秋戦国時代には、才能のある人が『孟子』で言うところの「労心者」である治者になろうとした。その結果、治者に必要な国家管理の議論が活発化した。土地を私有し市場に出入りする家族経営層が形成されたが、これらの家長も政治の主体ではなかった。国家的再分配が発達した専制君主制において、経済活動を左右するものは市場ではなく国家であった。それとは異なり、古代ギリシャの都市国家（polis）は市民の政治共同体という性格をもち、国家的再分配の力が弱く、oikos の市場を媒介とする経済活動が、経済を統合する重要な力であった。Oikos とは、奴隷も含む家族共同体であり、奴隷労働を活用する農場をもつ自給自足的経済単位であった。参政権をもつ市民の主力層は、oikos の所有者として私経済に対する関心が大きかった。要するに *Oikonomikos* は、oikos をもつ自由市民が知識人へと成長した成果であった。中国宋代以後および朝鮮王朝時代に、中小地主として治者を志向する知識人すなわち士大夫層が成長するにつれ、家庭管理論が成立することになった。古代ギリシャの市民知識人層に近い存在を東アジア前近代で探すならば、士大夫層である。このような文脈から、国家経済が力を発揮した中国では、経済の語源が国家管理となり、私経済が中心的な役割を担ったギリシャでは、その語源が家庭管理となったという事実を吟味する必要がある。

興味深いことに、「経済」という漢語はもともと国家管理を意味したが、後に家庭管理にも適用された。漢字文化圏において、家庭経済論は「家訓」と「農書」という二つの系列の著述で成立した。中国の家訓において、多くは節倹を治家の核心的な原則としていた。顔之推が 589 年頃に著した中国の代表的な家訓は 20 篇に達し、クセノフォンの *Oikonomikos* より分量が多かったが、家庭経済については粗略に叙述したにとどまった。家訓は対象を特定の子孫に限定せず、後孫一般に該当する規範であったが、*Oikonomikos* ほど、一般人を対象とした議論ではなかった。

中国では、古代ローマの農学者に類似する農家が、同時期に出現した[26]。農書は農業技術を主としたが、そこには家庭経済と国家の農業管理も盛り込まれていた。農書の家庭経済論は、対象を特定の家門に限定していない点で一般性をもったが、大概その内容は粗略

26　胡寄窓『中国経済思想史』上、上海人民出版社、1962/1983 年、482 頁。

であった。明代に、書名に「経済」という用語を入れた農書として『田園経済』（張師説編集）および『山林経済籍』（顧應祥編纂）が出現した点が注目される。後者を検討すると、家庭経済の内容はいまだ粗略である。家訓と農書の内容を合わせて家庭の物質生活について豊富に扱う著書も現れたが、その代表的な著述としては、1758 年に胡煒が編纂した『胡氏治家略』を挙げたい。

朝鮮では、李惟泰が 1677 年に作成した『庭訓』が、顔之推の家訓よりも分量ははるかに少ないが、より体系的な家庭経済論を盛り込んでいる。さらに「経済」を書名に入れながら、家庭の物質生活を中心とする農書も編纂され、代表的なものとして洪萬選が 1715 年に編纂した『山林経済』と、徐有榘が 1830 年に編纂した『林園経済志』を挙げることができる。漢字文化圏では、『林園経済志』が農業技術論と家庭経済論を綜合した著作として最も体系的かつ豊富な内容をもつものと考えられる。それは、*Oikonomikos* よりも体系的な家庭経済論であった。

『山林経済』『林園経済志』などは、家庭を対象に「経済」を取り上げた点で注目される。ここで「経済」は、国家管理論ではなく家庭管理論であり、さらに限定すれば、山林または林園にある農家の管理論となる。前近代においては、企業のほとんどは家族企業であり、家庭は消費だけでなく、生産の主体でもあった。前近代では家庭と国家が二大経済主体であったため、家庭管理がもつ経済的意義は大きかった。

『山林経済』を執筆した洪萬選の宗人である洪萬宗は、「山林経済序」で、「朝廷には朝廷の事業があり、これがすなわち朝廷の経済であるが、山林には山林の事業があり、これがすなわち山林の経済である。立場はたとえ違っても、経済である点では同じである」とし、家庭経済論を積極的に評価した。徐有榘は『林園経済志』の例言で、官吏の「済世之術」はよく整えられているが、非官職者の経世論（「非仕官済世之術」）に関する著述は『山林経済』しかなく、しかもそれが不十分なため自ら著述したと書いた。このように、家庭管理に対し、儒学の政策理想である「経済」という積極的な意味を付与した上で、家庭管理論を学問的体系として確立し、集大成しようとする努力が奨励されるようになったのである。

要するに漢字文化圏では、家訓と農書の発展の途上で家庭経済論が形成されたが、古代ギリシャは農書なしで家庭経済論を樹立したという特徴をもつ。国家管理では政治問題が、家庭管理では経済問題が重要な項目になるはずである。そのため、国家だけでなく、家庭の管理も「経済」の一環とみなすことで、漢語「経済」は economy の概念に接近するようになった。そのような点で、家庭管理論は経済学の成立において重要な意味をもつ。

「経済学」が political economy の翻訳語に採択される背景となった漢語「経済」の意味変化に関する以上の論議を整理してみる。第一、漢語「経済」が economy の概念に接近していった。第二、「経済学」という用語が現れ、その分野も古典学派の political economy の内容に接近していった。第三、漢語「経済」は、元来国家管理を意味したが、家庭管理の意味でも使用されるようになった。

3　political economy の概念に類似するその他の漢語

日本において、political economy の翻訳語として初めて「経済学」が採択されたが、漢語「経済学」はこの学問の性格と十分に合致しないので、日本および中国で訳語の代案が数多く現れた。「経済」という漢語の意味は economy 概念に近づいていったが、近代経済学が初めて流入する 19 世紀後半でも、両者の概念差は小さくはなかった。紀元前 91 年に完成した司馬遷の『史記』の中で、巻 30 は経済政策を扱った「平準書」であり、巻 129 は、民間経済を説明し、理財能力を発揮した人物を収録した「貨殖列伝」である。司馬遷が多様な経済政策を扱う書名を物価安定策である「平準」としたのは、近代的経済思想の芽と評価したい。司馬遷は「貨殖列伝」において、利益の追求が人間社会を動かす基本動機であり、「富とは学ばなくてもすべてが欲する人の情性である」とした。私利の追求という動機によって経済活動が調節され、物価が適当な水準へ収斂するとみた。

紀元後 90 年頃に班固が編纂した『漢書』の「食貨志」は、経済の制度と政策を総合的に叙述した。以後の中国の歴史書も「食貨志」という大分類項目のもとで該当王朝の経済を扱った。後代の歴史書における「食貨志」は内容が豊富になり、細目に分かれた。朝鮮政府が 1451 年に完成した『高麗史』も、高麗王朝の経済制度と経済政策に関する包括的な内容を「食貨志」という題目のもとで整理した。『漢書』「食貨志」は、「食」を穀物などの食べ物、「貨」を衣類と貨幣と定義した。つまり、「食貨」とは貨幣を含む財貨である。「食貨志」は財貨が「治国安民之本」とみた。中国史では、食貨が「基本経済活動にかかわる財政・政策のことを指しており、民間で経済を食貨と表現する例はほぼない」とした。[27]「食貨志」が国家の観点で経済政策を主として扱ったのは、中国と朝鮮における経済言説の特質を表している。以上をみると、中国人は古代から今日の経済に該当する範疇をもっており、朝鮮人もそのような概念を受け入れた。この範疇を表現する代表的な漢語が「食貨」であった。ただし、これは「貨殖」と異なり、民間の観点を欠いていた点が、その限界であった。利益追求の人間性を前提として民間経済を考察する『史記』「貨殖列伝」の観点が以後の官撰歴史書に継承されなかったことは、漢字文化圏における経済思想の発展および経済分析の出現を妨げたといえる。

この「平準」と「貨殖」と「食貨」を、梁啓超は『新民叢報』3 号（1902 年）において、political economy の訳語の候補として、次のように検討したことがある。『漢書』にみられる「食貨」は political economy の研究対象である財貨を包括してはいるが、その主体をもたない。『論語』と『史記』にみえる「貨殖」は、「私富」に傾き、政治的含意をもたないが、political economy は公共の財富を重視する概念である。それで梁啓超は、『史記』の「平準」が、社会全体に利益を与える制度ではない点で限界をもちつつも、人民の利益を均等にしようとする意思をもち、かつ広く知られている点で、これを訳語に採択したが、

27　斯波義信編著『中国社会経済史用語解』東洋文庫、2012 年、138 頁。

すぐにそれも放棄した。当時の梁啓超は、国家を主体として経済を理解しようとする儒学思想の限界を克服しなかったのである。『史記』の「食貨」は、訳語として検討されたものの実際に使用されたことはなく、唐慶增は、『書経』の「洪範」に出てくる「食貨」二政が、今日の経済知識を意味するとした[28]。イギリスの最後の重商主義者であるジェームズ・ステュアート（James Steuart）は political economy を、国家の多様な欲求を充足させる技術（art）と定義したが、この概念に近い漢語は「食貨」二政と考えられる。「食貨」は経済学の範囲を限定する際に役立つ用語であり、漢語「経済」は経済学の理想をよりよく説明し、以下に挙げる「理財」は、経済学の原理をうまく説明するものである。

1862–65 年の間海外へ留学し、日本人として最初に、経済学など近代的学問を学んだ西周は、経済学を「富国安民の学術」と認識した[29]。中国では、「富国学」および「富国養民策」という訳語が現れた。スミスは『国富論』において、「経済学は人民と国家の双方を豊かにしようとするものである」（Political economy…proposes to enrich both the people and the sovereign.）とした。漢字の「国」は元来、狭い意味では朝廷、広くは王室と官府を包括する概念であり、「富国」は国家財政の充実を意味した。そのような点で、安民富国または富国安民は、富国よりは古典学派経済学の内容に接近する漢語であった。儒学の経済目標は、民生を安定させ、続いて国家財政を豊かにするという安民富国に集約される。安民と富国という目標は、すでに『論語』で提示されており、儒家に愛用される用語であった。スミスの political economy は、諸国民（nations）の富を探究するものであり、諸国民の富は、労働生産性に後押しされる人民の消費水準を意味した。そのような点で、「安民富国」はスミスの『国富論』の概念を十分に取り入れているわけではなかった。一方、漢語で元来「国」と「民」は両立する概念であったが、「国」は「民」を包括する概念としても使用され、「富国」が人民の富を包括する場合もあった[30]。中国で「富国学」という訳語がかなりの支持を得たことは、このような概念の進化によると思われる。ただし、「富国」が国民の富という概念へ転換するには至らなかったことで、「富国学」が訳語として広く普及することはなかったかもしれない。また、「富国養民」は、二つの用語を並列した点で、訳語としては短所があった。

中国では、梁啓超らが「生計」を訳語にしようと主張した。「生計」は物質的欲求の充足行為という意味に近い漢字である。梁啓超と同じ時期に中国で活動した厳復は、生計・家計・国計などを包括的に扱う学問として「計学」という用語を創案し、economics の訳語にしようとした。

ロビンズ（L. Robbins）が 1932 年に発刊した『経済学の本質と意義』（*Essays on the Nature and Significance of Economic Science*）によって、economics が稀少資源の効率的管理を扱うという現代的定義は確立したが、この新古典学派の定義に通じる「理財」が、日本と中国で有力な訳語になったことがある。理財は「財政運用をいい、特に収支を改善するもの

28　唐慶增『中国上古経済思想史』台北：古亭書屋、1975 年、19 頁。
29　大久保利謙編『西周全集』4 巻、宗高書房、1981 年、137 頁。
30　李憲昶「金堉의 経済思想과 経済業績」『潛谷 金堉 研究』태학사、2007 年、159–63 頁。

をいう」[31]が、民間が財貨を効率的に管理するという意味にも拡張されうる。「理財」は『易経』の「繫辞」下伝にすでに現れており、人を集める方法とみつつ、「義」につながる行為と把握された。『易経』では、利益の追求が占いの最終目的の一つであり、その「乾卦」文言伝では、「利益は義の調和のとれた状態である」(「利者義之和也」)とする。その反面『大学』伝文 10 章では、財用に力を注ぐ為政者は、義を損ねる小人であると規定した。宋代に、王安石が富国強兵のために理財を積極的に追求する一方、司馬光などの旧法党は理財追求を警戒していた。中国明清代と朝鮮王朝の議論では、後者の観点が主流であった反面、実際の財政運用では理財が重視された。『明史』「食貨志」の冒頭には、「彊本節用が理財の要諦であり、明一代理財の方道」の「本末」を条目ごとに記録したと書かれている。国家の経済制度・政策を包括する概念は食貨であり、その管理原則をまとめた概念が理財である。

経済学の現代的定義が、財貨とサービスの生産・消費のための資源の効率的な管理によって厚生福祉の増進を図る学問であるならば、その対象である経済を最もよく表現する漢語は「利用厚生」である。利用厚生は『書経』「虞書」大禹謨に出てくる[32]。蔡沈は 1209 年に完成した『書経集伝』で、「利用」とは、工業技術と商業を発展させ、人民の経済活動を効率的に図ることをいい、「厚生」とは、衣食住を豊かにし、生活水準を向上させることを意味すると解釈した。「厚生」は物質生活を裕福にするものを中心とするが、医術を通じた健康の増進、文化的に豊かな生活なども含まれる。つまり、利用厚生は今日の用語でいう技術・経済・文化を包括したものである。文化的財貨とサービスの生産と消費、そして効率的な技術の選択も経済行為に該当するので、利用厚生は訳語「経済」に非常に近い用語である。「利用」できれば、「厚生」は図られる。18 世紀後半の朝鮮では、技術と市場の発展を通じて生活水準を向上させ、富国を図ろうとする実学者たちが利用厚生の標語を掲げた。マーシャル(A. Marshall)は 1890 年に出版した『経済学原理』(*Principles of Economics*)において、経済学とは「厚生に必要な物質の獲得と利用に密接に関連する個人的・社会的行為(individual and social action which is most closely connected with the attainment and with the use of the material requisites of wellbeing)」を研究する学問であると定義したが、この定義は「利用厚生」の概念に通じる。しかしながら、利用厚生は有力な訳語として取り上げられず、1870 年に制定された日本の大学規則に、利用厚生学という授業科目があるにすぎなかった。訳語は 2 文字を理想とするが、利用厚生は 4 文字という弱点をもつためであっただろう。

『大学』に出る「生財」も経済行為を包括的に表す用語として広く使われた。日本に留学した中国人が 1903 年に編纂した『新爾雅』では、「生財」の概念を狭めて生産という用

31 斯波義信、前掲書、1 頁。

32 「正徳利用厚生」が出る大禹謨は、偽古文尚書にあるもので、東晋時代の偽作だと言える。しかし、「正徳利用厚生」とその前後の句節は、『春秋左伝』魯文公 7 年(紀元前 620 年)の記録にも現れており、大禹謨の偽作者がそれを引用したのである。「経済」は、道徳の「正徳」と経済の「利用厚生」を包括する内容なのである。

語と解いたこともあり、財貨の交換・生産・貯蔵を包括する用語とみられることもあった。「生財」は国家の経済管理の次元での用語であった。家庭経済の管理に当たる用語として「治生」および「治産」があったが、これらが訳語として取り上げられたことはない。「治生」は『史記』「貨殖列伝」に出る。朝鮮王朝の安鼎福は、「治産理財を家庭が免れることはできない」とした。[33]

「経済」という漢字は、古典学派の political economy に多少通じるところはあるが、資源の効率的配分という新古典学派の economics とはほとんど関係がない。「理財」や「利用厚生」が訳語として考慮されたにもかかわらず、これらよりも、重農主義学派・古典学派・新古典学派のいずれの概念とも離れた意味をもつ「経済」という訳語が、結局選択されたことは興味深い。韓・日・中のエリートは新学問を通じて国家の富強を図ろうとしたが、そのような理想を「経済」がよりよく表現していたためであったと考えられる。[34] 経済という漢語は、儒教の政策理念を幅広く盛り込んでいたが、その経済的目標は、安民富国や利用厚生にまとめられるのである。

4　イスラム世界およびインドにおける翻訳語

7 世紀にイスラム教が興隆してから 14 世紀頃まで、イスラム圏は経済・科学技術・文化においてめざましい発展を成し遂げた。この時期に経済思想もまた発展する中で、economy の訳語となる iqtiṣād という概念が成立した。7 世紀に編纂された『コーラン』では、iqtiṣād の語源に該当する muqtaṣid という用語が登場したが、これはイスラム信者でも非信者でもない、信仰的に中途半端な人々を指す。中世イスラム世界の名高い思想家ガザーリー（Abū Ḥāmed al-Ghazālī, 1058–1111）の主著に、*al-Iqtisād fi'l-I'tiqād*（The Golden Mean in Faith）という神学書がある。ここでは、どちらか一方に片寄らない中道的な立場が、正しい信仰だとされた。Muqtaṣid とは異なり、iqtiṣād は肯定的な価値を付与されるようになったのである。ガザーリーは、消費など経済行為においても、中庸の原則に高い価値を付与した。[35] 彼に影響を与えたアリストテレスは *Ethica Nicomachea* において中庸の原則を重視したが、それは消費および分配的正義のような経済的領域にも適用された。イスラム宗教学者であるアルジャウズィーヤ（Ibn Qayim al-Jauziya, 1292–1349）は、その著書 *al-Ruh*（精神）において、iqtiṣād は過度な浪費と極度の節約の間で中庸をとる適切な行為と定義した。iqtiṣād は公正で賢明な資質であるが、「けち」は分別がなく、不正な精神による、恥ずかしく非難されるべき資質であると評価された。中世のキリスト教において、economy は「完全性」や「神の摂理」を意味したが、[36] イスラム教でも iqtiṣād

33 『順庵先生文集』巻 14、雑著、「示弟鼎祿、子景會遺書 己卯（1759）」。

34 李憲昶、前掲論文、2008 年。

35 S. Mohammad Ghazanfar and Abdul Azim Islahi. *Economic Thought of Al-Ghazali (1058–1111 A.D.)*. Jeddah, Saudi Arabia: Scientific Publishing Centre, King Abdulaziz University, 1997, pp. 8–13.

36 重田園江、前掲論文、85 頁。

は神の祝福を受ける資質と評価されており、興味深い。

イスラム世界は 19 世紀後半に西ヨーロッパの強力な衝撃を受けて、al-Nahda という文化復興期を迎えた。その中で近代経済学が導入され、iqtiṣād が economy の訳語に採用されたようである。イスラム世界でも、経済政策をも含む国家機能に関する水準の高い言論はあったが、economy の訳語を、節約しながら享有する中庸的消費という意味の iqtiṣād に求めたのである。イスラム経済観の特徴は、宗教的な倫理観に基盤をおき、中庸を追求するものだが、iqtiṣād は中庸的な消費という意味で、宗教的徳目の概念であった。

アッバス王朝（Abbasids）の 750–1000 年間、多くのギリシャの本が翻訳された。これは、近代ヨーロッパ語の概念の翻訳で資産になった。例えば、10 世紀にミスカワフ（Abu 'Ali Ahmad ibn Muhammad ibn Ya'qub Ibn Miskawayh, 932–1030）が *Ethica Nicomachea* を *Tahzib ul akhlaq* という書名に翻訳したが、akhlaq は、倫理の現代アラブ語である ikhalaqiya と同じく、『コーラン』に出た khalaqa という原形から派生したものである。

西ヨーロッパは古代ギリシャの概念を発展させて、古典学派の political economy、さらに新古典学派の economics という近代学問を確立し、その学問に見合う概念を作った。Political economy または economics という概念は、いずれも古代ギリシャ語から進化したものである。ところが、ギリシャの学問を真っ先に学習し、翻訳してヨーロッパへ伝えたイスラム世界では、economy の語源を収録したアリストテレスの著書も早期に翻訳したにもかかわらず、house が manzil や bait などと、family が usrah や ailah などと翻訳されたことからみて、economy の訳語である iqtiṣād は古代ギリシャの概念の訳語と関係なく、『コーラン』から進化して成立したようである。このような概念史からみると、西ヨーロッパが先に近代学問を確立した一つの要因は、イスラム世界よりも、古代ギリシャの学問をよく発展させたためであると考えられる。遊牧社会であるアラブ世界においては、部族が社会生活に強い影響力をもち、家庭が社会単位として自立しなかったため、古代ギリシャの家庭管理論という概念が定着し難かったのかもしれない。

Political economy または economics のサンスクリット訳語は、インド古代の国家管理論を集大成した *Arthashastra* という書名に由来する。*Arthashastra* はマウリヤ（Maurya）帝国（紀元前 321–185）の初代首相であるカウティリヤ（Kautilya）の著作として知られているが、紀元前 4 世紀～紀元後 2 世紀にかけて現存したテキストで作られたとみるのが通説である。それは 12 世紀まで影響力を発揮したが、その後消失し、1904 年に再発見された。この著書は、賢明な君主の統治術として、政治、山林管理・関税・福祉などの経済政策、軍事戦略などを扱っている。Artha は「生計」または「富」を意味し、arthashastra は「富と福祉の学問」または「国家管理術」という意味である。Arthashastra という用語は、政治・外交・経済・行政などを包括する国家管理に関する言説という点で、漢字文化圏の「経済」言説に類似するが、「経済」より功利主義的で、富を中心とする物質生活を重視した概念である。[37] そのような点で arthashastra は漢語の「経済学」よりも politi-

37　L.N. Rangarajan. *Kautilya: The Arthashastra.* Penguin Books India, 1992, p. 100; Romila Thapar. *Early*

cal economy の概念に近い。ヨーロッパにおいて economy の語源は常に肯定的な価値をもち、「経済」は儒教の政治理想を標榜し、iqtiṣād はイスラム教の徳目に通じていたが、*Arthashastra* はマキャヴェッリ的政治工学の要素をもつため、道徳的非難を受けもした。*Arthashastra* が成立するまでは、これほどに経済政策論を総合的かつ体系的に提示した著述は、中国の『管子』のみであったと考えられる。インドでは、ヨーロッパ近代文明の影響を受ける以前に国家管理論を体系的に提示した唯一の著作が *Arthashastra* だと評価されることからわかるように[38]、その後、インドの経済思想はヨーロッパ及び中国と異なり、持続的な発展を見せなかったようだ。

植民地インドの名高い詩人であり、イスラム哲学者であるムハンマド・イクバール（Muhammad Iqbal, 1877–1938）は、最初の著書として「経済学研究」という意味の *Ilm Al-Iqtisād* を 1903 年に出版した。彼が育ち、活動したパンジャブ（Punjab）地方はペルシア語の影響を受けたウルドゥー語を使用していたが、ウルドゥー語がイスラム圏の用語を多く包含していたために、iqtiṣād も使用されたとみなければならない。イスラム教徒が economy のアラブ語の訳語を使用したことは、ヒンドゥー語の使用運動を展開したヒンドゥー教のエリートが、economy のサンスクリット語訳を探す刺激となったと思われる。

Arthashastra という著作が 1904 年に再発見されて以後、この書名は political economy ないし economics の訳語となって、その支持者を増やしていった。漢字文化圏とインドの双方において、political economy ないし economics の訳語が複数出て競合したが、国家管理論という意味をもつ「経済学」および arthashastra の双方があまりに包括的な意味をもちすぎるという不満を招いたにもかかわらず、最終には訳語として選択されたことは興味深い。インドにおいては漢字文化圏のように、生計に該当する vartta や、富の学問という意味の sampatishastra が挑戦状を突きつけたが、成功しなかった。漢字文化圏の「理財」のように、狭い意味であったからかもしれない。

おわりに

興味深いことに、漢字文化圏およびインドで採用された political economy の訳語の語源は、近代経済学が成立する以前の political economy の意味と相通じるものであった。紀元前 4 世紀前半にギリシャのクセノフォンは、家庭管理論の *Oikonomikos* を著述し、その後ヘレニズム時代である紀元前 2 世紀末に、politike oikonomia という用語が現れた。一方、「経済」は元来国家管理に直結される用語であったが、後には家庭管理を意味する「山林経済」や「林園経済」などの用語としてその意味が拡張された。インドでは国家管理に関する *Arthashastra* という著作が出現し、その書名が今日のヒンドゥー語の訳語になった。ユーラシア大陸の広い地域にわたって、経済学は家庭・国家管理思想から発展し

India: From the Origin to AD 1300. University of California Press, 2002, pp. 52, 184–85.

38 T.N. Ramaswamy. *Essentials of Indian Statecraft: Kautilya's Arthashastra for Contemporary Readers*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers, 1962, p. 1.

てきたのである。イスラム圏で採択された翻訳語の語源 iqtiṣād は、economy がもつ節約という意味に通じる。節約は家庭と国家の管理原則といえる。

カール・ヤスパース（Karl Jaspers）が命名した枢軸時代（Axial Age）である紀元前一千年の間に、思考と制度の領域で革命が起こり、紀元後、人類史に不可逆的な影響を及ぼした。この時期にギリシャの哲学者、中国の士、インドのバラモンや仏教僧など、新しい類型の知識人が現れ、新しい先験的な概念を発展させ、その概念が肯定的に制度化された。[39] この枢軸時代の後半部に、地中海世界では *Oikonomikos* という著書と politike oikonomia という用語が、インドでは *Arthashastra* という著書が出現した。クセノフォンの *Oikonomikos* は、メソポタミア文明を継承したペルシアの国家管理術の影響を受けた。中国でも political economy の有力な訳語候補である「理財」「食貨」「利用厚生」および「安民」と「富国」が、いずれも紀元前に出現した。「経済」という表現は紀元後に現れたが、すでに紀元前に「経世」「済民」および「経制」という用語はあった。

枢軸時代における古代国家体制の発展は、経済学概念の語源である「国家管理」という用語が出現する背景を成した。特に中国の春秋戦国時代には、国家管理の議論が活発で、国家体制の発展が目覚しく、political economy の訳語候補が多数出現した。国家管理の効率化は「理財」に表現されていた。国家管理の哲学として儒学が出現し、「経済」は儒学の理想になった。「安民」と「富国」と「利用厚生」は、儒家が考える国家経済政策の基本目標であった。「食貨」という用語は、この時期に経済を独自に把握する観念が成立したことを表している。今日の経済と経済学の概念が、市場経済体制の成立という近代的変革を背景に成立したのだとしたら、その語源は、古代国家の発展を背景にしたのである。

このように political economy とその翻訳語だけをみても、ヤスパースのいう枢軸時代は概念の原型が形成された時期である。そのように成立した概念は、コゼレック（Koselleck）が命名した 1750 年から 1850 年までの「鞍上の時代」（Sattelzeit）にヨーロッパで根本的な変化を経て、近代世界とそれ以前とを分ける断絶が発生した。これは概念史における第二次枢軸時代と言える。その変革は他の大陸に波及した。今日の経済学など、社会科学で使用する概念は、多くがこの第二次枢軸時代に再び、または新しく誕生したものである。

このような概念変革は、社会経済的な背景をもっている。新石器時代である紀元前 9 千～紀元前 8 千年頃から始まった農耕・牧畜が各地に伝播し、枢軸時代には青銅器、続いて鉄器の使用によって農耕社会が確立され、文明が成立し、古代国家が出現したが、このような技術的・制度的発展が概念時代を開いたと考えられる。今日の経済学と経済の概念を成立させるもとになった市場経済体制の形成、科学革命、そして個人主義と契約国家と社会の成立という条件は、16 世紀から 18 世紀のヨーロッパ近世（early modern）において整えられた。

39 Shmuel N. Eisenstadt. “The Axial Age: The Emergence of Transcendental Visions and the Rise of Clerics.” *European Journal of Sociology* 23: 2 (1982), p. 298.

第一次枢軸時代に成立した概念は、近世のヨーロッパでまず根本的な変革を経た。ヨーロッパが近代経済学を確立した18世紀に、アジアでは、いまだ科学革命は起こらず、自由な個人と契約社会という観念も生まれていなかったため、科学的経済分析の学問体系は成立せず、それに立脚した経済と経済学の概念も出てこなかった。前近代には、文明圏ごとに独自的な概念体系が存在していたが、ヨーロッパで成立した近代的概念は、全世界にわたって通用するに至った。そのため、漢字文化圏においても、経済学の吸収とその概念の翻訳という課題が台頭したのである。

基本的に政治論であった漢語「経済」の言説は、近世には、朝・日・中の三国すべてにおいて、物質的欲求の充足を一層重視するようになった。経済学が political economy の訳語として選択された背景には、「経済」概念の進化も一役を果たしていたのである。アラブ語の iqtiṣād も進化して、ついに economy の訳語になった。

初めに導入された古典学派経済学の道徳哲学的性格は、それと親和性をもつ漢語である「経済学」という訳語が出現するのに作用した。そして古典学派経済学が前提とする政治体制である契約国家の観念がなじみの薄いものだったこともあり、国家政策論を主とする視角で古典学派経済学が理解されたことは、「経済学」が訳語に選択されるのに有利に働いたと思われる。

漢字文化圏は political economy および economics の訳語として多様な候補をもち、その訳語の確定を巡って活発な模索をみせたが、インド文化圏とイスラム文化圏はそれほどでもなかった。門戸開放以前における漢字文化圏の経済言説が、イスラム文化圏やインド文化圏より活発であったことがその一つの要因であるう。斯波義信の編著『中国社会経済史用語解』は、古代から清末まで使用された経済用語を5,000語前後解説している。さらに表意文字という漢字の利点も作用したであろう。

1902年に梁啓超が『新民叢報』の創刊号で political economy の新しい訳語である「政術理財学」を提示したことに対し、「東京愛読生」は『新民叢報』3号で不満を表しながら、数千年の文明国である中国が数多い古文献の中で人類社会の必須の学問である political economy に相応しい訳語を一つぐらい、どうして探すことができないだろうかと反問した。しかしながら、梁啓超をはじめとする中国の碩学たちでさえ、political economy の概念に相応しい、満足できる訳語を探すことはできなかった。『国富論』水準の学問を確立しなかった東アジアが、アダム・スミスの political economy に相応しい分析的概念としての漢語をもたなかったのは当たり前であるが、新古典学派の概念に近い漢語として「理財」があり、マーシャルの定義に近い漢語として「利用厚生」がある。このように、東西間の概念の発達水準には格差があるものの、東アジア三国、特に日本は近代の概念を消化し、訳語を迅速に生み出し、普及させる文化的力量を蓄積してはいた。概念史研究においては、このような両面性を認識する必要があるだろう。